

出久根達郎

古本綺譚



中公文庫 ©1990

古本綺譚

一九九〇年二月二五日印刷
一九九〇年三月一〇日発行

著者 出久根達郎

発行者 嶋中鵬二

整版印刷 三晃印刷
カバー トープロ
用紙 本州製紙
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八―七
振替東京二―三四
ISBN4-12-201695-9
Printed in Japan

中公文庫

古 本 綺 譚

出久根達郎著



中央公論社

目次

I

楽しい厄日

怪談を買う話

雀の自殺

蚯蚓屋敷^{みみず}

伊豆の借金

犬の冗談

54 49 44 37 24 11

番号の向う

ひとつ家や

琴瑟相和きんしつし

お詫びのしるし

神かくし

古本綺譚

II

狂聖・芦原將軍探索行

芦原將軍の「詔勅」

芦原將軍との会見

「芦原將軍自叙伝」の出現

芦原將軍の前半生

60

77

81

98

122

125

131

132

148

167

182

芦原將軍と大逆事件

196

芦原將軍の正体

213

芦原將軍の死

239

III

紙屑の中の手紙

249

古書目録の「晴れ着」

260

目録殺し

269

ききめ

283

あとがき

286

初出一覧

文庫版あとがき

292

古本綺譚

I

楽しい厄日

この世にあって誰も見たことがないような本を掘りだしたいと、凄じょうな奇蹟を夢みているのが愛書家で、そういう本を入手して売って儲けたいと、常にまじめに考えているのが古本屋なのである。

で、そういう客とそういう古本屋が、時に妙なかたちで相對することがある。

古本屋のおやじは、一日中狭い帳場に陣どって、本を読んだり本を動かしたり本をたばねたり本をはいたり、面白くもない顔をして本と取り組んでいるが、なに実際はもう楽しくてしょうがないのである。ひとりほくそ笑んでいると、よそからばかと思われているので、わざと苦虫かみつぶした顔を作っているのである。

本を売りたいという電話がかかってきても、「ああ」と不機嫌に返事をする。本心は胸がワクワクして、もしやおそろしいような珍本でも、と期待しているのだが、「どんな本をお持ちですか？」といかさまかったるそうに問いかえす。

「あの、芥川の羅生門とか」

あるじもちろんギョツとして受話器を握りなおすが、おさえて、

「他には何か？」怒ったようにいう。

「あと漱石のころと、鷗外の雁と」

「それ、みな昔の？」

「ええ、うんと古いんです。大昔」

待てよ？

「文庫本じゃないでしょうね？」

危ない危ない。

「ちがいます。単行本です。れっきとした。ほこりをかぶって汚れていますけど。もったいないから。祖父がよんだ本です。四十冊ばかりあります」

あるじ、盆と正月がネギしょってきたような、なんだかわけのわからない心持ちになって、タクシーを奮発する。タクシーのスピードがすこぶるのろく感じられて、ええいとばかり右足で左足を踏みつけ、口の中でブーブーなりながら、てめえで思いきりアクセルを踏んでいるつもりなのである。息せききって飛びこんでみれば、三十年前の角川文庫が四十冊。

二十代の若者にしてみれば、自分が生まれる前の本なので、古く感じて当り前で、古本屋の感覚でおしはかろうとするから失敗するのである。

電話の買物は、つい期待するだけに、こんな調子の結果が多い。

いつだったか、七十すぎのお婆さんから、シャンドリヤの写真がふんだんに入った厚い本が七冊あるのだが、とりにきてくれるかと打診があった。どうやらインテリア関連の写真集らしい。はずんでかけて、見るとこれが全部ヤマギワデンキの型録。

期待するから、いけないのである。

この世で誰も見たことがないような本なんてあるものじゃない。ましてやそんなものがおのが手に入ると夢想すること自体、こっけいのきわみである。しかし古本屋という商売はそういう夢で支えられているところがある。古本を求める客も、またそうなのだ。だから時として喜劇が起きる。

それは、こうである。

出先から戻ると妻が、「お客さまから本を買いにきてほしいと電話がございました」という。

「どういう本をおもちか詳しくたずねましたか？」とあるじ。

この夫婦はなにより礼儀を重んじるゆえ、日常敬語を用いて会話をかわしているのである。

「はい。古い本がたくさん土蔵からでてきたそうです」

あるじは太い眉をぴくりとさせたが、例によって能面のような表情をくずさぬ。

「具体的な書名はおっしゃいませんでしたか？」

「はい。キタムラモンタロウのソ、なんとかのシがあるそうです」

「え？ キタムラ？」

モンタロウでぴんときたのである。

「なんだかむずかしい漢字が並んでいて読めないそうです。そういう本が土蔵にあふれるほどあるのだそうです。とりこわすそうで、急いで下見してほしいということです」
あるじはうわの空になった。おっとり刀でそのあふれる土蔵めざして自転車を走らせた。

キタムラモンタロウというのは北村門太郎、透谷のことである。ソなんとかのシは『楚囚之詩』にまちがいない。この世にあって誰も見たことがない本ではないけれど、これはそれに近い近代文学書の稀覯本の親玉であった。

明治二十二年の四月、二十二歳の透谷はこれを自費出版した。B6判横綴わずか二六頁の叙事詩集である。

「余は此楚囚之詩が江湖に容れられる事を要しませぬ。」とはなはだ頼りない序文を記した透谷は、この小冊子が印刷されるや、やはり自信を喪失してしまい、一冊のみあましてあとの全部を廃棄処分した。と透谷は日記に書いたが、実は残されたのは一冊だけ

ではなかった。稀覯本につきものの数奇な伝説はここから始まった。

『楚囚之詩』の完全本が初めて世上に現れたのは、四十二年後の昭和五年のことであった。それまで「幻の本」視されていたのである。本郷の古本即売展に三十五銭でそれが出た。買ったのは大学生である。するとその学生をつかまえて、是非五円でゆずれと血相かえて談判する紳士があらわれた。客が何事かと二人をとり囲み、訳を知って全員が発奮した。くだんの学生は本を抱きしめて逃げるように会場から消えてしまったという。これを出品した窪川書店は一躍有名になった。その本が透谷日記にいう「たった一冊」であろうと思われたが、実はそうでなかった。十数年たって奇しくも窪川書店が再び二冊めを落手した。それは八十円で売ったという。窪川書店主の記録によれば、その頃もう一冊が市場にでたという。しかし現在完全本は恐らく三、四冊といわれる。

昭和三十七年に神戸の古書市場に出品された『万象図譜』という四六判四十頁袋綴の袋から、バラバラになった『楚囚之詩』が三冊分でできたので大さわざになった。この本は明治二十四年に出版されたもので、透谷の詩集の発行所春祥堂と同じ京橋にあり、その為、両者共同製本所を利用していたらしく、廃棄処分された透谷のそれをシン紙に用いたものと推定された。そこで愛書家は『万象図譜』さがしに血まなこになった（当初この本は万物図譜と誤って喧伝された）。『万象図譜』は珍本でもなんでもなく、その当時、三百五十円程度で古本屋で売られていたのである。ところが折角入手して開